

第24回島根乳腺疾患研究会

日 時：2017年3月25日（土）13：40～16：40

会 場：独立行政法人国立病院機構浜田医療センター 2階 総合研修センター
〒697-8511 浜田市浅井町777番地 TEL.0855-25-0505

当 番 世話人：独立行政法人国立病院機構浜田医療センター 乳腺科部長 吉川 和明

1. その人らしさを支えるためのコミュニケーションを考えるー若い乳癌終末期患者とのかかわりを通してー

松江赤十字病院 8 東病棟

原谷 桃子, 田淵 律子, 土居日菜子
菅井 志帆, 稲田 里美, 安達香奈子
内田 真弓

同 診療看護師

横山 淳美

同 がん看護専門看護師

加藤由希子

同 乳腺外科

楨野 好成, 曳野 肇

【はじめに】自分の想いを表出されない患者との関係作りに難しさを感じていた。看護介入を通じ傍に寄り添うことの大切さを学べたため報告する。

【経過】20代女性、妊娠中に右乳がん・転移性肝腫瘍診断、帝王切開で女兒出産。化学療法の奏功なく中止、疼痛コントロールのため入院。

多職種との合同カンファレンスや母の情報により、患者像を把握し受容的な姿勢で関わった結果、想いを話されるようになった。

【考察】医療者の積極的な介入ではなく、傍に寄り添うことがその人らしさを支えるコミュニケーションのひとつである。

2. 闘病に強い意志をみせたびまん性肝転移患者に対する診療看護師の関わり

国立病院機構浜田医療センター外科診療看護師

西谷 有子

同 乳腺科

吉川 和明

同 外科

永井 聡, 渡部 裕志, 高橋 節

栗栖 泰郎

乳がん患者をはじめ、病を持つ患者は消え去ることのない不安を抱いている。医療者として、病のみならず病を抱えた人間を理解し、携わることが大切であるのは周知の事実である。

この度、闘病に強い意志をみせた乳がん、びまん性肝転移患者を診療看護師として担当する機会を得た。診療看護師の関わりは患者の心情の吐露しやすさにつながり、病気治療に加え心のケアについても効果的であったと示唆された。ここに報告する。

なお、診療看護師とは、米国 Nurse practitioner (NP) に準じた大学院専門教育を受けた看護師のことである。治療 (Cure) と看護 (Care) を統合した医療を患者に提供することを役割としている。

3. デスカンファレンスを通して学んだ乳がん患者の1例

松江赤十字病院看護部

烏田 志乃, 多々納美紗子, 石倉可奈恵

横山 淳美, 加藤由希子

同 乳腺外科

楨野 好成, 曳野 肇

両側乳がん終末期の40代女性A氏。初診から2年後に骨髄腫腫症再燃、癌性髄膜炎診断にて入院。病棟看護師はA氏の看護に対し、癌性髄膜炎の症状・病状進行の早さへの戸惑いやA氏や家族に何もできなかったという悩みや後悔の思いといった悲観的な感情が残った。そこで多職種とデスカンファレンスを実施。参加者が思いを言語化することで、多方面からの視点でA氏の思いを知る機会となった。振り返りを行うことで、その時には気付かなかった点が浮き彫りにされ、医師・看護師の悩みや後悔の念を緩和させることができた。終末期患者に対する病棟の体制が不十分であり、その中でも何かできることがあることを再確認し、次に繋がる学びを得ることができた。今後は入院早期から多職種を含めたカンファレ

ンスを実施し、患者家族の希望を達成できるように看護の統一をしていく。

4. ドキソルビシン・エピルビシン投与による血管炎の実態調査

国立病院機構浜田医療センター

化学療法室 渡邊 直美
同 乳腺科 齋藤 秀美
同 外科 吉川 和明

【目的】乳がん治療に使用されるドキソルビシン、エピルビシンは血管炎の発現が多い薬剤であり、症状が出現すると患者のQOLの低下や化学療法を受けることに対して消極的となり、治療意欲の低下につながる。症状出現時の対応や対策を検討し、患者の苦痛の軽減につなげる。

【方法】2016年1月から12月までの治療を完遂した患者のカルテから血管炎の発現状況を抽出し分析した。

【結果】血管炎の有無については、年齢のみ有意差がでて、BMIや投与量に差はなかった。1クールからグレード2以上の血管炎が発現した患者はCVポートに移行した。処置後も硬結、色素沈着が残ったため、自宅での日常生活への影響についても調査していく必要がある。今後も継続的に検討を行い、若年層には積極的なCVポートやPICCの挿入後、抗がん剤治療の開始を検討する。また、QOLの向上のためにも、全例で抗がん剤投与後コールドパックで冷却を行い、血管炎の予防を図っていく。

5. 乳腺間質肉腫の1例

国立病院機構浜田医療センター外科研修医

原 和志, 砂口 天兵
同 外科診療看護師
西谷 有子
同 外科
内仲 英, 永井 聡, 渡部 裕志
高橋 節, 栗栖 泰郎
同 乳腺科
吉川 和明
同 病理
長崎 真琴
島根県立中央病院 乳腺科
橋本 幸直

45歳女性。5年前より右乳房B, D領域に腫瘤を自覚していた。急速に増大し、当院乳腺科受診。右乳房全域を占める約17cmの腫瘤あり。腋窩および鎖骨上リンパ節触知せず。精査の結果乳腺間質肉腫が疑われた。他

院へ紹介し、乳房切除+センチネルリンパ節生検+胸壁皮膚移植術施行。乳腺間質肉腫と確定診断された。術後4カ月で両肺・右鎖骨上窩・腋窩リンパ節に再発した。AI療法を行い、転移巣は著明に縮小したが、副作用のため2コースで終了。その後再燃し、術後10カ月で永眠された。乳腺間質肉腫の化学療法として、AI療法が有効な症例があると思われる。

6. ホルモン療法が奏効し壊死による腫瘍内出血をきたした超高齢乳癌の1例

島根県立中央病院外科

渡部可那子, 徳家 敦夫
同 乳腺科

高村 通生, 武田 啓志, 橋本 幸直

症例は91歳女性。左乳房のしこりを自覚しMMGで左乳腺腫瘍を指摘され、当院紹介受診。左C領域に径2.5cm程度の境界不明瞭な腫瘤を触知した。細胞診・針生検で浸潤性乳管癌と診断。手術希望なく、ホルモン受容体陽性であったため、ホルモン療法(アナストロゾール)のみ開始した。ホルモン療法開始から9か月後、腫瘍増大傾向を認めたためホルモン剤をエキセメスタンに変更したが、疼痛出現により手術を希望され、左乳房切除術施行。病理組織検査の結果、組織学的に腫瘍の大部分は血腫や壊死物で構成され、carcinomaの大半は壊死に陥っている所見であり、治療効果はGrade2a(高度の効果)であった。術後はエキセメスタンを継続し、術後約4か月の時点で再発兆候は認めていない。

7. 画像検査で異常がなく髄液穿刺で発見された乳癌癌性髄膜炎の1例

松江市立病院乳腺内分泌・血管・胸部外科

内田 尚孝, 野津 長, 松井 泰樹
同 病理診断科
吉田 学
同 神経内科
高井 宏司

症例は44歳女性。20XX年、Stage IIIcの両側同時性乳癌(右:cT1cN0M0, 左cT3N3M0)診断で化学療法(FEC療法)を開始した。FEC2クール目の当日、めまい・歩行困難が出現。同日、神経内科に紹介し、脳MRIを実施した結果、異常なしであった。その4日後、めまいの再燃にて、救急外来を受診された。他症状として、呂律がまわりにくい、嘔気、頭痛があった。脳MRIを再検したが、やはり異常なしであった。入院の上、再度、神経内科にコンサルトし、髄液穿刺を実施し

でもらった結果、癌性髄膜炎であることが判明した。転移乳癌の診断で、化学療法の内容をペルツズマブ+トラスツズマブ+ドセタキセルに変更した。しかし、全身状態の急激な悪化を認め、初診から3か月後に永眠された。画像所見で異常を認めなくても、臨床症状から癌性髄膜炎を疑うときは、積極的に髄液穿刺を考慮すべきであると考えられた。

8. 過酸化水素による放射線増感効果が得られた進行再発乳癌の1例

島根大学医学部附属病院放射線治療科

植 敦士, 稗田 洋子, 玉置 幸久
猪俣 泰典

同 乳腺・内分泌外科

百留 美樹, 板倉 正幸

【症例】70歳代女性, 胸壁浸潤を伴う右進行乳癌。切除困難と判断されレトロゾールとモーズペーストで加療開

始したが腫瘍縮小効果に乏しく, 治療開始20カ月後には出血や疼痛の制御が困難となった。症状の軽減と腫瘍減量を目的に過酸化水素併用の放射線治療を58 Gy/29分割/5.8週間施行した。照射により腫瘍は著明に縮小し出血や疼痛も制御できた。有害事象は放射線皮膚炎(Grade 2)がみられた。照射部位はその後も増大なく経過したが他部位の転移巣が増大して放射線治療終了後2年半に永眠された。

【考察】進行乳癌に対する放射線の効果は限定的であるが, 放射線治療に過酸化水素を併用することにより高い放射線増感効果が得られた。

【特別講演】

「乳房画像診断の最近の話題

～2D-MG, Tomosynthesis & ultrasonography～」

独立行政法人国立病院機構東名古屋病院

乳腺外科 遠藤登紀子 先生